CLF REPORT

同志社大学
学習支援・教育開発センター レポート

Center for Learning support and Faculty development report

2019.3
vol.30

CONTENTS

01 P2-P3
各部会活動報告
- FD支援部会
- 学習支援検討部会

開催報告
- FD懇話会
- ガールズラボ

02 P4-P7
ラーニング・コモンズ運営状況
2017年度「キャンパスライフに関するアンケート調査」集計結果

03 P8-P10
各学部・研究科・センターFD活動報告
学外FD企画参加記
2019年度 教育方法・教材開発費 採択テーマ
FD関連企画のご案内

04 P11-P12
2018年度「大学入学準備講座」開催報告
センター事務室からのお知らせ
BOOKS新着図書情報
Column 大学教育の今

各部会活動報告

FD支援部会

2018年度は、FD支援部会の下に次の3つのワーキング・グループを設置しました。

①「教育効果向上策検討ワーキング・グループ」では、個々の授業改善、つまりFDのミクロな部分を主に検討いただきました。2017年度に設けた教育効果点検ワーキング・グループを引き継ぎ、教育改善・教育効果向上を目的に導入された既存のツールと手法（シラバス、授業講評、学生による授業評価アンケート等）について、再点検いただき、さらなる有効活用と教育効果向上につながる様々な方策を検討いただきました。次年度も、今年度に提示された課題（宿題）を検討していきたいと考えています。

②「内部質保証検討ワーキング・グループ」は、各学部・研究科・センターのDP、CPにもとづく質保証の検討を行っていただく、FDのミドルな部分を主に検討いただきました。2017年度に設けた同ワーキング・グループを引き継ぎ、まず各科目とDP、CPの関係について検討いただきました。ワーキング・グループからの提言を受け、各科目とディプロマ・ポリシーとの関係性整理に活用可能なツールとして、「カリキュラムマップ」について意見交換を行いました。また、「キャンパスライフに関するアンケート調査」実施方法等の変更についても検討いただき、今年度は、本学Learning Management System（e-class）のアンケート機能を用いて実施することにしています。学生には大学HPやe-classメッセージ機能、学修支援システム（DUET）の大学からのお知らせ欄、大学発行の個人メールアドレス宛への通知、学内掲示、チラシ等で周知を展開していきます。尚、ワーキング・グループからの提言は、次年度のワーキング・グループに引き継いでいきます。

③「ICT活用検討ワーキング・グループ」では、今年度は主に、現行の遠隔講義等の実施に係るマルチメディア教材作成支援費制度の見直しを行い、審査制度が確立している教育方法・教材開発費制度に盛り込むなど、制度の統一を図りました。ICT活用のビジョンについては、ワーキング・グループで活発な意見交換が行われました。今年度に提示されたその他の課題（宿題）とともに、次年度も引き続き検討していきます。

本年度は、委員の先生方にはご多忙な中、ワーキング・グループでの議論をはじめ、部会運営にご協力をいただきましたことにあらためてお礼申し上げます。特に、取りまとめ役を担っていただいた麻生潤先生、有井健先生、松木啓子先生、小藤弘樹先生、加藤恒夫先生には、この場を借りて篤く御礼申し上げます。また、ご協力いただきました本学関係部署の皆さまにも心より感謝申し上げます。

（FD支援部会長　大島 佳代子）

学習支援検討部会

2018年度の事業計画は、①ラーネッド記念図書館ラーニング・コモンズでのセミナー、イベント検討、②ラーネッド記念図書館ラーニング・コモンズの運営検討、③LAとの連携によるTAの質向上、④学生の主体的な学習を促進するための取組みの4項目でした。

事業計画の達成のため、4つのワーキング・グループ（以下、WG。「理系特化型サポートWG」、「リメディアルサポートWG」、「京田辺キャンパス学生向けサポートWG」、「LA・TA研修プログラムWG」）を設置し、各テーマについて検討を行っていただきました。

①ラーネッド記念図書館ラーニング・コモンズでのセミナー、イベント検討については、4月に図書館と共催で松岡 敬学長と青山学院大学の野末 俊比古教授をゲストに招き、リニューアルオープン記念イベントを開催しました。また、図書館が主催する講習会をラーニング・コモンズで開催するなど、相互に連携を図りつつ運営することができました。さらに、京田辺キャンパス学生向けサポートWG協力のもと、12月には同志社女子大学の上田 信行特任教授をゲストに招き、「ラーニング・コモンズ活用のススメ」としてワークショップを開催しました。

②ラーネッド記念図書館ラーニング・コモンズの運営検討については、昨年度のFD支援部会でも要望として挙がっていた、京田辺のラーニング・コモンズへの教員配置について、2019年4月1日付けで任期付教員1名（准教授）を採用することが決定しています。また、ラーニング・コモンズ開設初年度の利用実態を把握し、今後の運営の材料とするため、「ラーネッド記念図書館ラーニング・コモンズの利用に関するアンケート調査」を実施しました。その他、学習相談の運営にあたっては、リメディアルサポートWGからの意見も参考に、より専門的な内容の相談だけではなく、高校レベルから大学レベルへの学習へと橋渡しが必要な学生も利用しやすい環境整備に取り組み、LAを複数のプロジェクトに割り当てることでLAの視点からも施設の活性化や学習相談体制の強化に取り組みました。

③LAとの連携によるTAの質向上については、10月に3日間にわたり「LA&TAランチタイム交流会」を開催しました。「LA・TAをしていて嬉しかったこと」や「進路のこと」、「学ぶこととまねることの違い」等について、研究分野や研究科をまたいだ意見交換の場とすることができました。また、LA・TA研修プログラムWG協力のもと、主に今出川でのLA研修制度の改善策の検討のほか、次年度以降のLAとTAを対象とした交流会の開催についても提言を受けています。

④学生の主体的な学習を促進するための取組みについては、理系特化型サポートWG協力のもと、京田辺独自の取組みとして、理工学部の教員を講師として、「Writing & Presentation Tutorial Class」を通期にわたり開催しました。学部を問わず、さまざまな学生が国際学会のプレゼン、ポスター発表、英語によるレポートや論文作成のために主体的に活用している様子が確認できました。

本年度は、委員の先生方にはご多忙な中、ワーキング・グループでの議論をはじめ、部会運営にご協力をいただきましたことにあらためてお礼申し上げます。また、ご協力いただきました本学関係部署の皆さまにも心より感謝申し上げます。

（学習支援検討部会長　大久保 雅史）

開催報告

FD懇話会

2018年11月8日の第11回教務主任会議終了後に、教務主任の先生方を対象に第1回FD懇話会を開催しました。学習支援・教育開発センターの教員が「正課科目と授業外学習の連動」および「同志社大学における教学IR事業の現状と課題」について話題提供を行いました。キャンパスライフに関するアンケート調査の分析結果やラーニング・コモンズの利用状況等、当センターがこれまで蓄積してきたデータをもとに各学部・研究科・センターの教員と意見交換する貴重な機会となりました。

科学するガールズ養成プログラム

同志社大学の「科学するガールズ養成プログラム」は、国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）の「平成30年度女子中高生の理系進路選択支援プログラム」に採択されました。女子中高生に対して科学に触れる機会を設定し、実験体験やOGとの交流を通じて理系の楽しさに触れ理系女子の将来像を実感し理解してもらおうとするものです。8月に2泊3日のサイエンスキャンプが行われたほか、大学の研究室で実験体験をしてもらうガールズラボ（下表）、サイエンスキャンプやガールズラボの振り返りと意見交換を行う「ガールズサイエンスカフェ」などが開催されました。

10月13日（土）	10:00～12:00	家電の秘密を探ろう！
11月10日（土）	10:00～12:00	触感の数値化：いろんな表面の摩擦を測ってみよう
11月17日（土）	10:00～12:00	気象データを使って台風の構造を調べてみよう
12月15日（土）	10:00～12:00	光と目の科学：色ってなんだろう？

「キャンパスライフに関するアンケート調査」の実施方法変更に関するお知らせ

成績通知WEB化に伴い、1年次生と3年次生を対象に、毎年3月末の成績通知書配付時に調査用紙で実施していた「キャンパスライフに関するアンケート調査」について、本学LMS（e-class）のアンケート機能を用いた調査方法に変更します。

本アンケート調査は学生IDの記入（任意）を求めており、経年比較することで、学生自身が学修成果をどのように感じているかを把握できるほか、学修行動や課外活動の状況についても把握が可能です。本学の教育改善を検討する際の貴重な材料となりますので、引き続き、回答にご協力のほどよろしくお願いします。

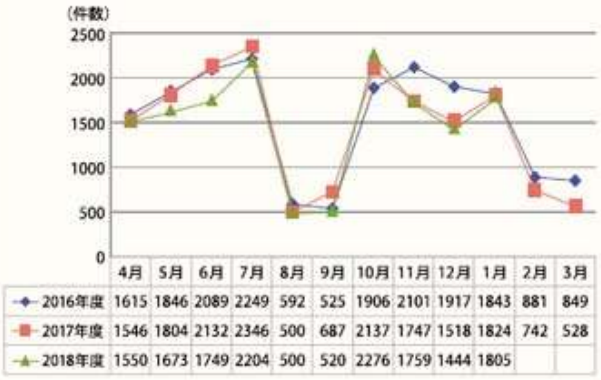
※学生IDの記入欄はありますが、集計ならびに分析にあたっては、個人が特定されない形で行われています。

ラーニング・コモンズ運営状況

エリア別利用状況

良心館ラーニング・コモンズ２階のインフォダイナー、３階のグループスタディルームの各月の利用状況のデータをまとめたものが下のグラフです。2016年度以降、インフォダイナー（図１）、グループスタディルーム（図２）ともに、春学期と秋学期の授業期間中（試験期間含む）に多く利用されていることが分かります。

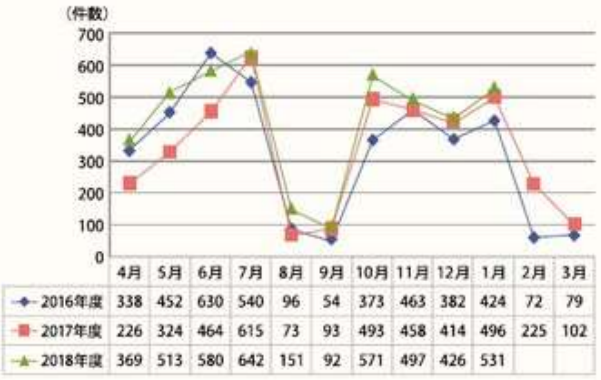
ラーネッド記念図書館ラーニング・コモンズのインフォダイナー利用状況は図３の通りです。４月以降、春学期に利用が増え、８月および９月は減りましたが、秋学期も利用があります。１月は予約対象エリアが増えたため、予約件数も増えています。



	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
2016年度	1615	1846	2089	2249	592	525	1906	2101	1917	1843	881	849
2017年度	1546	1804	2132	2346	500	687	2137	1747	1518	1824	742	528
2018年度	1550	1673	1749	2204	500	520	2276	1759	1444	1805		

インフォダイナーの全16エリアが予約対象

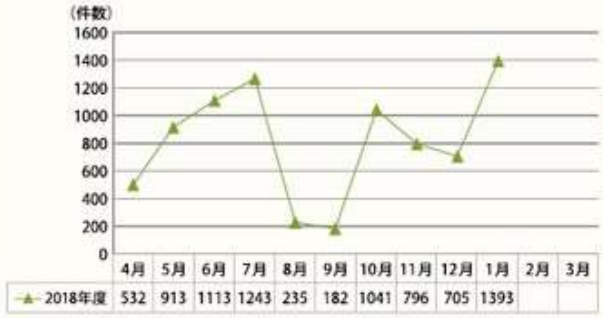
図1 良心館ラーニング・コモンズ２F インフォダイナー予約件数



	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
2016年度	338	452	630	540	96	54	373	463	382	424	72	79
2017年度	226	324	464	615	73	93	493	458	414	496	225	102
2018年度	369	513	580	642	151	92	571	497	426	531		

グループスタディルームの５部屋が予約対象

図2 良心館ラーニング・コモンズ３F グループスタディルーム予約件数



	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
2018年度	532	913	1113	1243	235	182	1041	796	705	1393		

インフォダイナーの10エリアが予約対象（2018年12月まで）
インフォダイナーの全17エリアが予約対象（2019年１月から）

図3 ラーネッド記念図書館ラーニング・コモンズ インフォダイナー予約件数

ラーネッド記念図書館ラーニング・コモンズ インフォダイナー利用の様子

LA秋学期研修

良心館ラーニング・コモンズでは今出川校地に勤務するLA（ラーニング・アシスタント）を対象に、9月18日（火）（11：00～15：00）に秋学期の研修を実施しました。この研修では、LAから、春学期の学習相談経験を踏まえて、どんなことを学んだか、今後どのような対応ができるかをテーマに１人10分を目安に発表を行いました。発表を踏まえてLA同士で意見交換を行い、相談対応の体験の共有をしました。また、アカデミック・インストラクターから、LA勤務の心構えについてレクチャーを行い、業務内容を再確認しました。

ラーネッド記念図書館ラーニング・コモンズでは、LA全員を対象として、9月20日(木)（11：00～17：30）に「2018年度LA秋季研修」を実施しました。研修では、学習支援の考え方やアドバイジング・コーチング的な関わり方を体験的に学びました。また、LA個々の春学期の経験を外化したり、全体で議論したりすることで秋学期の学習相談の対応について意識を共有しました。

学習相談

良心館ラーニング・コモンズ３階およびラーネッド記念図書館ラーニング・コモンズのアカデミックサポートエリアでは、アカデミック・インストラクターやLAが学生の学習相談に対応しています。2018年度の相談者は良心館では延べ843名、ラーネッド記念図書館では延べ591名でした（2019年１月末時点）。相談件数は良心館で989件、ラーネッド記念図書館では623件となっています（図４）。良心館では昨年度と同じく「レポートの書き方」、「調査・研究の方法」、「論文の書き方」、「日本語チェック」の相談が多く、ラーネッド記念図書館では「特定の科目の学び方」が大半を占めています。両校地で学習相談の内容が大きく異なることが分かります。

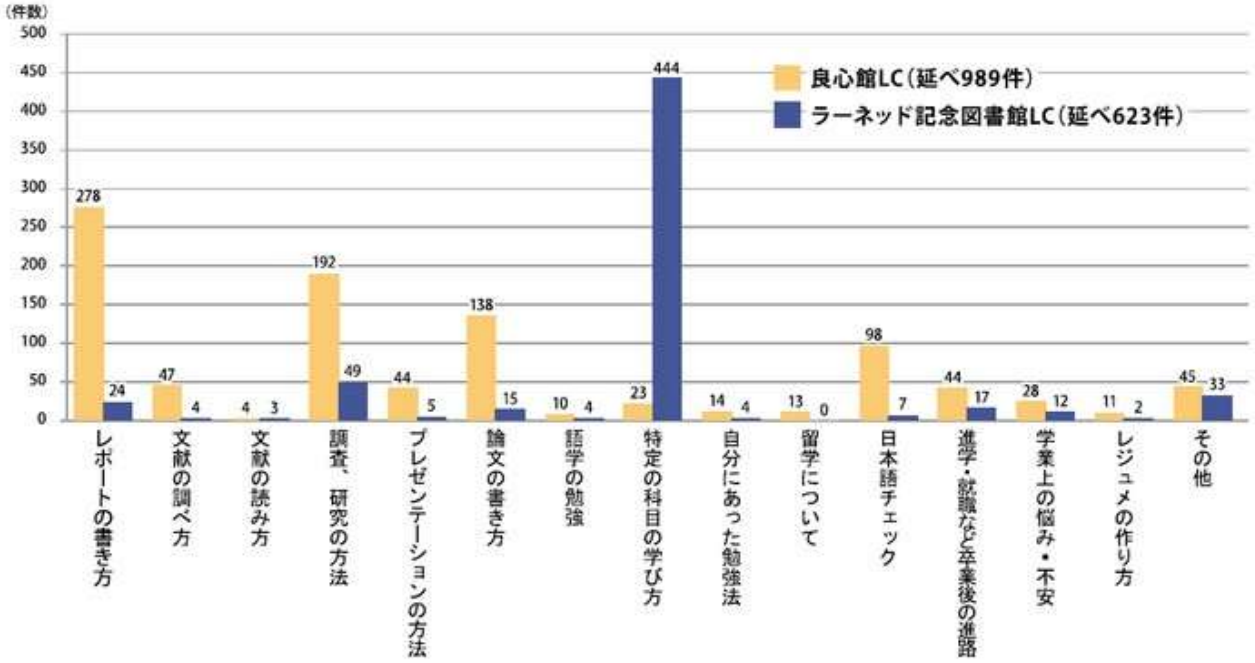


図４ 両校地　学習相談の内訳（2018年４月～2019年１月）

アカデミックスキルセミナー

良心館ラーニング・コモンズでは３階ワークショップルーム01で、2018年10月10日から12月13日にかけて、アカデミックスキルセミナー（秋学期）を開催しました。８種類のセミナーを24回開催し、延べ54名の参加がありました。

30分セミナー　12:30～13:00（お昼休み内）

セミナー名	概要
1 レポートの構成法	レポートとはどのようなものなのか。レポートを書く際、最低限知っておくべき基本を学びます。
2 プレゼンの方法	伝わるプレゼンの作り方・話し方等、事例を元にして学びます。
3 引用の方法	なぜ引用するのか、どのような引用形式があるのか。レポートのルールを学びます。
4 卒論の書き方	卒論の提出を控えた４年生に、その時期にするべきことをお伝えします。

90分セミナー　13:10～14:40（３講時）

セミナー名	概要
1 情報探索の方法	調べ方の見当もつかないものをどう調べるか。大学で本当に必要な情報探索法を学びます。
2 グループでのアイデア出し	グループで多くのアイデアを出す方法について学びます。（受講者が３名以上必要）
3 聞き取りの方法	インタビュー調査のアポイントの取り方、質問項目の作り方、調査時のマナーをお伝えします。
4 学術文献の読み方	自らの課題、テーマを念頭に、どう文献を読み進めればよいのかを学びます。

ラーニング・コモンズ運営状況

コモンズカフェ

秋学期はコモンズカフェを３回（第29回、第30回、第31回）、良心館ラーニング・コモンズ２階グローバルビレッジにて開催しました。第31回はLAが企画・運営を行いました。

【第29回　散歩と肉と鉄の棒～近代日本の偉人と健康法～】

日　時：2018年12月21日
ゲスト：望月 詩史 准教授（同志社大学 法学部）

【第30回　天狗の鼻が高いのは】

日　時：2019年1月16日
ゲスト：久留島 元　嘱託講師（同志社大学 文学部）

【第31回　銀閣寺と朝鮮学校】

日　時：2019年1月28日
ゲスト：板垣 竜太 教授（同志社大学 社会学部）

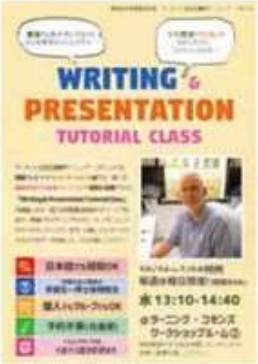
ラーネッド記念図書館ラーニング・コモンズ内のプログラム・イベント

ラーネッド記念図書館ラーニング・コモンズでは、2018年度春学期に引き続き、秋学期にも「Writing & Presentation Tutorial Class」を実施しました。また、秋学期独自のイベントとして「大学院生LA&TAランチタイム交流会」と「ラーニング・コモンズ活用のススメ」を開催しました。

「Writing & Presentation Tutorial Class」は、英語で作成した論文や要旨、レポート、プレゼン資料のネイティブチェック、口頭発表の発音チェック、国際学会での発表マナーの指導などを受けられるプログラムです。学部生から博士後期課程の大学院生までどの分野でも相談できます。秋学期は10月24日から２月６日まで毎週水曜３講時に全13回開催し、延べ24名が利用しました。

10月18日・26日・31日には「大学院生LA&TAランチタイム交流会」を開催し、37名の大学院生が参加しました。普段関わりにくい、自分とは異なる研究科・研究室の大学院生と「LA・TAをしていて嬉しかったこと」や「自身のキャリア」、「学ぶこととまねることの違い」について意見交流をしました。

12月11日には同志社女子大学の上田信行特任教授をお迎えして、「ラーニング・コモンズ活用のススメ」というワークショップを開催しました。「learning learning」をテーマに、「学び」を学ぶことや、ラーニング・コモンズにおける多様な学び方について参加者全員で考えました。ワークショップ終盤には参加者でラーニング・コモンズのCMを作成し、館内で放映しました。



ラーニング・コモンズの情報は、以下のURLよりご参照ください。

ラーニング・コモンズHP　http://ryoshinkan-lc.doshisha.ac.jp/

※学習支援・教育開発センターHP（https://clf.doshisha.ac.jp/）からでもアクセス可能です。

2017年度「キャンパスライフに関するアンケート調査」集計結果

学習支援・教育開発センターでは、2004年度から「キャンパスライフに関するアンケート調査」を実施しています。この調査は、学生の学習状況や意識を捉えることによって、本学の教育改善につなげることを目的としています。毎年3月下旬の成績交付時に、1年次および3年次の終了時点の学生を対象に調査を行っています。2017年度は、1年次生の調査で4469件（回収率：69.2%）、3年次生の調査で4111件（同65.6%）の回答を得ることができました。今回も前回（vol.29）に引き続き、新規項目の集計結果を紹介します。

科目登録する際に学生はどの程度シラバスを閲覧し授業内容を確認しているのか？

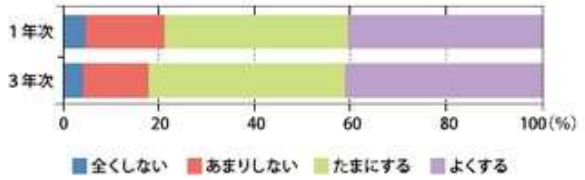


図1：学年別にみた「科目登録する際のシラバス参照頻度」

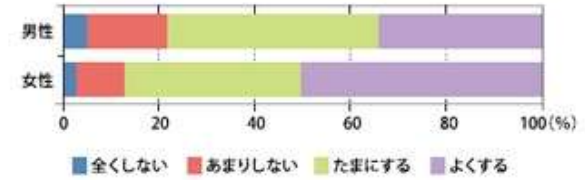


図2：男女別にみた「科目登録する際のシラバス参照頻度」（3年次）

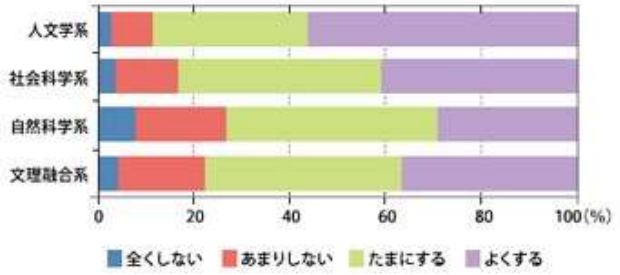


図3：学問領域別にみた「科目登録する際のシラバス参照頻度」（3年次）

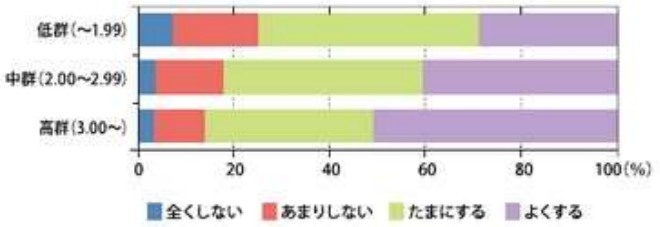


図4：累積GPAにみた「科目登録する際のシラバス参照頻度」（3年次）

シラバスには、授業の概要、計画（進行スケジュール）、到達目標、成績評価基準など、学生が授業科目を選択する際に参考となる様々な情報が記載されています。

しかしながら、学生はシラバスを有効に活用できているのでしょうか。そこで、2017年度調査では、学生の『授業への取り組み』を尋ねる項目の一環として、「科目登録する際のシラバスの参照頻度」を追加しました。

図1は、学年別に集計結果をまとめたものです。図1をみても明らかなように、学年間で回答の分布状況に大きな相違は認められません。もっとも多い回答は、「よくする」で1年次、3年次どちらも4割ほどの割合を占めています。これに、わずかな差で「たまにする」が続いています。一方、「あまりしない」と回答した学生は約15%で、「全くしない」と回答した学生に至っては5%未満にとどまっています。今回の調査結果をみる限り、多くの学生は、科目登録する際にシラバスを閲覧し授業内容を確認しているようです。

それでは、このような取り組みは、属性によって異なっているのでしょうか。そこで次に、3年次調査データを用いて、学生の性別、学問領域、学業成績（累積GPA）との関連を検討してみましょう。図2から図4は、性別、学問領域、累積GPA別に回答を整理したものです。

はじめに、男女別に回答結果をまとめた図2をみると、男子学生に比べて女子学生の方が、シラバスの参照頻度が高いことがわかります。「よくする」と回答した割合は、男子学生が34.1%、女子学生が50.3%で、15ポイント以上の差が認められます。

続いて、学問領域別に回答傾向を確認してみましょう。回答結果を示した図3から、科目登録する際のシラバスの参照頻度は人文学系がもっとも高く、社会科学系、文理融合系、自然科学系の順で低下傾向にあることが読み取れます。具体的には、人文学系でシラバスを閲覧し授業内容の確認をすることを「よくする」学生は5割（56.3%）をこえている一方、自然科学系では、そうした学生の割合は3割（29.1%）を下回っています。

最後に、累積GPAとシラバス参照頻度の関係をみてみましょう。回答を整理した図4によると、学業成績とシラバスの閲覧頻度には明確に正の関係が認められ、累積GPAが良好になるほど、シラバスの参照頻度が高まっています。

*人文学系＝神学部+文学部+心理学部+グローバル・コミュニケーション学部+グローバル地域文化学部
社会科学系＝社会学部+法学部+経済学部+商学部+政策学部
自然科学系＝理工学部+生命医科学部
文理融合系＝文化情報学部+スポーツ健康科学部

以上、「2017年度キャンパスライフに関するアンケート調査」について集計結果の一部を紹介してきました。調査票および集計結果の詳細については、学習支援・教育開発センターのホームページにて公開しています。

【集計・分析：菅澤 貴之（学習支援・教育開発センター 准教授）】

学習支援・教育開発センターHP　https://clf.doshisha.ac.jp/investigation/investigation.html

各学部・研究科・センターFD活動報告

このコーナーでは、各学部・研究科・センターにおけるFD活動の報告を順次掲載していきます。

文学部

2019年1月30日午後3時より寧静館5階会議室にて、川那部隆司立命館大学文学部准教授をお迎えして、文学部FD研修会「ルーブリックを用いた成績評価のポイント」が開催された。川那部氏はパワーポイントを用いて、米国で開発された学修評価の基準の作成方法である「ルーブリック」について、実践的かつ実際的に具体例を示しつつ講演を行われた。ルーブリックは評価水準である「尺度」と尺度を満たした場合の「特徴の記述」で構成され、レポートやプレゼンテーション等の定性的な評価に向く。何がどの程度できているかいないかを可視化し、教員の教育活動の改善と学生の学習の促進を可能にする。印象に残ったのは、作成にあたり複数名でコミュニケーションを取りながら何度も修正を重ねることの必要性である。ルーブリックの完成を目指す修正の繰り返しの過程自体がFDとなってゆくのである。講演後は講師とフロアの間で、立命館大学での事例などについて活発な質疑応答がなされた。

経済学部

経済学部では、教員を対象としたFDと学生の学習支援を中心とした取り組みを二大柱として、学部のFD活動に取り組んでいる。

各柱の一例は次のとおりである。教員に対するFDとして、本年度は学習支援・教育開発センターと協働で「キャンパスライフに関するアンケート調査」結果等を用いて学生の履修行動を解析するとともに、履修行動と学生の特徴の関係について分析した。その結果はFD講演会にて教員にフィードバックし、適切な教育環境の維持・改善のための情報提供を行っている。

他方、学生への取り組み例として、「教育方法・教材開発費B区分」の補助を受けた数学の自学自習プログラム（e-learning教材）の運用と、夏期休暇中の数学補習講座（座学）開講によって数学が苦手な学生をサポートしていることがある。このe-learning教材は経済学部のオリジナルサイトからも閲覧でき、経済学部を志望する高校生にも広く活用されている。

生命医科学部

2018年度生命医科学部は、大学コンソーシアム京都主催の第24回FDフォーラムに加盟校として参加し、「生命科学部の教育のあり方を考える」というテーマで第9分科会を主宰した。本分科会では、東京薬科大学、立命館大学、同志社大学の各生命系学部所属の教員が登壇し、各学部のカリキュラムをはじめ、学部の特徴的な取り組みや問題点、多様な学生への対応、就職に関する話題、理系教員に対するFDの取り組み、等々幅広く事例報告がなされた。同志社大学からは生命医科学部医情報学科太田哲男先生、生命医科学研究科石浦章一先生にご登壇いただき、学部教育に関する様々な話題提供がなされ、大変好評を博した。国内の生命系学部の現状、課題、将来の展望、等々について、全国から集まった大学教職員とともに考えるという非常に貴重な機会となった。

各学部・研究科・センターFD活動費について

学習支援・教育開発センターでは、各学部・研究科・センターレベルでの組織的なFDに関する取組に対し、FD活動費（支援費）の補助を行っています。以下の点に留意していただき、積極的な活用をお願いします。

FD活動費（FD支援費）の使用例

- 卒業時アンケート調査・新入生対象アンケート調査関連費用
- FD講演会・セミナー等開催関連費用
- 授業評価における専門的知識の提供に対する謝礼
- FD関連書籍購入費用　等

※組織の懇親会や親睦会は該当しません。

留意事項

- 教員個人レベルでの研究会、研修会参加費、部会委員としての催しへの参加経費等は「教育開発調査活動費」制度より支出する。
- 組織代表者への支出の場合、その後のフィードバックの状況（内容）を示すこと。
- 補助の対象は非営利活動に限定する。また、文部科学省等の補助事業には使用できない。
- 補助を希望する場合は、事前に学習支援・教育開発センター事務室に申し出る。
- 会合費*を使用する場合は、本学専任教職員を補助対象とする（学外講師の会合費は補助可）。
- FD講演会や会合の開催テーマや趣旨について、資料や記録等を提示する。

* 会合費について
- 研修会開催等の会議費用（昼夜を問わない）は１人あたり単価1,200円（税別）までとする。ただし、夕食時における学外講師（＝本学教職員以外）との懇談費用等の場合は１人あたり単価3,000円（税別）までとする。
- 会合費にアルコールは含まない（会合費としての補助は不可）。

ご不明の点は、学習支援・教育開発センター事務室までお問合せください。

学外FD企画参加記

学習支援・教育開発センターでは、ホームページやメーリングリストを通じて、FDに関連したセミナーやシンポジウムのご案内をしています。実際に参加された先生にセミナーの様子や感想をお伺いしていますので、今後の参加の参考としてください。
※今後開催予定のFD関連企画はP.10でも紹介しています。

平成30年度国立教育政策研究所 教育改革国際シンポジウム

テーマ　学びのイノベーションに向けた創造的で働きやすい学校空間 ーシンガポールと日本の事例からー
開催日　2019年1月30日（水）
主　催　国立教育政策研究所

免許資格課程センター　田中 希穂　准教授

国立教育政策研究所が毎年開催してる教育改革国際シンポジウムの今年度のテーマは「学校空間」であった。教員の執務空間に着目し、学習者の豊かな学びにつながる新しい時代の学校運営の姿や教師の役割と、それを支える「働く場所」としての学校施設の在り方について、シンガポールと日本の実践例の紹介とともに検討された。

新学習指導要領にあげられている21世紀型スキルを育むために、カリキュラムマネジメントを通じて教育活動や組織運営等、学校全体の在り方の改善が求められる中、教育現場に期待される機能・役割は大きくなり、教員への期待と負担の両側面が高まっている。このような時代に向けて、学習者の学びを促進し、教員が創造性を持ち、協働しながら活動できる環境について検討することは意義があると感じた。

紹介されたシンガポールにおける学校設備や日本の高等教育機関の実例などと比較すると、本学では、アクティブラーニングをはじめとする新しい教育方法を実践できる空間や学生へのさまざまなサポート体制などは、すでに比較的実現していると思われた。一方で、保護者や地域コミュニティーを巻き込んだ教員・学習者・地域の三位一体の学習を促進する「場」の提供を含めた仕組み作りが今後の課題ではないかと感じた。また、教員と学習者との共通空間の必要性も感じられた。学習者同士の協働空間と教員の研究室を近づけ、その間に教員・学生共通の場を設けることによって協働空間が生まれ、学生へのサポート体制の強化、教員の創造的空間の拡大、教員の働き方改革が実現するのではないかと考える。

紹介されたような小規模校と同様のことを大規模校において実施するのは困難であるが、これからの新しいスタイルの学びに適応した教室構造や、学習者・教員・地域が協働した学びの実現が可能な環境づくりの検討は必要である。

全国語学教育学会 第44回年次国際大会

開催日　2018年11月23日（金）～11月26日（月）
主　催　全国語学教育学会（JALT）

グローバル教育センター　Robert William Aspinall　教授

During this conference, which was attended by about 3,000 teachers, researchers and publishers involved in language education, I went to over a dozen different talks, presentations and symposia about aspects of teaching and learning that I found directly relevant to my own position as a professor in the Center for Global Education at Doshisha.
For example, I attended two talks specifically about 'English as a Medium of Instruction' (EMI). On the Saturday, I attended a talk given by Javier Salazar of Tsukuba University who addressed the issue of teaching Area Studies through the medium of English language teaching. In his case he was talking about teaching Canadian Studies to a mixed group of 16 students of different nationalities. Because it was a relatively small group he was able to cater for the needs of the different students. He said "EMI works if you make it about the students". On the Monday I attended a talk on 'EMI Programs and the new academic word list' by a team from Niigata Prefectural University, which proposed making greater use in EMI classes of the Academic Word Lists which have been compiled. About two thirds of EMI classes in Japan are aimed at Japanese students only who have limited English language levels. The word lists will help teachers select or construct the appropriate materials for each class. One of the most important challenges for EMI programs in Japan is matching the classroom materials with the actual level of English language aptitude achieved by the students when they begin the course.

Members of the CGE team here at Doshisha are not only concerned with developing 'best practice' in the teaching of a variety of undergraduate courses to a mix of students with native and non-native levels of English language aptitude, but also in collaborating with colleagues around Japan who are leading and teaching similar programs. Following attendance at this conference I invited one of the presenters, Paul Tanner of Shiga University, to lead a CGE workshop on 26th January this year on the teaching of academic writing to non-native speakers of English. The workshop was very successful and will be followed in future years by similar workshops in which teachers at Doshisha (full-time and part-time) are able to share ideas about how to improve the delivery of EMI classes in this university and in others. These workshops are open to all teachers at Doshisha University who teach in the medium of English.

2019年度 教育方法・教材開発費 採択テーマ

本学における授業改善をさらに促進するために、専任教員を対象として、新たな教育方法および教材開発に必要な費用全般を対象とする補助を行う「教育方法・教材開発費制度」を設置しています。

2019年度は、この制度を利用してA区分1件、B区分2件の取組が行われます。

開発テーマ	所　属	申　請　者
A区分（1件あたり税込50万円以下）		
「ソーシャル・イノベーション教育のための アクティブ・ラーニング読本」の開発	政策学部	佐野 淳也
B区分（1件あたり税込200万円以下）		
基礎数学の入学前・リメディアル教育支援法の開発	生命医科学部 理工学部 文化情報学部	野口 範子　伊藤 利明 宮坂 知宏 近藤 弘一 下嶋 篤
視聴覚に障がいのある学生が受講する講義における教育方法	法学部 文化情報学部 神学部 免許資格課程センター	瀬領 真悟　梶山 玉香 阪田 真己子 関谷 直人 中瀬 浩一

※これまでの採択テーマ及び成果報告書（本学教職員のみ閲覧可）は
学習支援・教育開発センターホームページ上に掲載していますので、以下のURLよりご参照ください。

教育方法・教材開発費制度のページ　https://clf.doshisha.ac.jp/support/development/materials.html

※教育方法・教材開発費制度を利用して開発された教材の一部は、本学オープンコースウェア上で公開しています。

同志社大学オープンコースウェア　https://clf.doshisha.ac.jp/opencourse/opencourse.html

FD関連企画のご案内

学習支援・教育開発センターでは、ホームページやメーリングリストを通じて、学内外で開催されるFD関連企画を紹介しています。メーリングリストでの情報配信をご希望の場合は、学習支援・教育開発センター事務室までお知らせください（本学専任教職員を対象とします）。

今後、学外で開催される企画は以下の通りです。その他の企画についても随時お知らせしますので、積極的なご参加をお待ちしています。

研究会・研修会のご案内ページ　https://clf.doshisha.ac.jp/research/research.html

開催日程	企画名称	会　場
6月1日（土）・2日（日）	大学教育学会 第41回大会	玉川大学
6月8日（土）・9日（日）	日本高等教育学会 第22回大会	金沢商工会議所 金沢歌劇座
6月14日（金）・15日（土）	New Education Expo 2019	大阪マーチャンダイズ・マート
8月9日（金）	私立大学情報教育協会 ICT利用による教育改善研究発表会	東京理科大学 森戸記念館
8月26日（月）～28日（水）	日本リメディアル教育学会 第15回全国大会	金沢工業大学
9月4日（水）～6日（金）	私立大学情報教育協会 教育改革ICT戦略大会	アルカディア市ヶ谷
9月6日（金）～8日（日）	初年次教育学会 第12回大会	創価大学

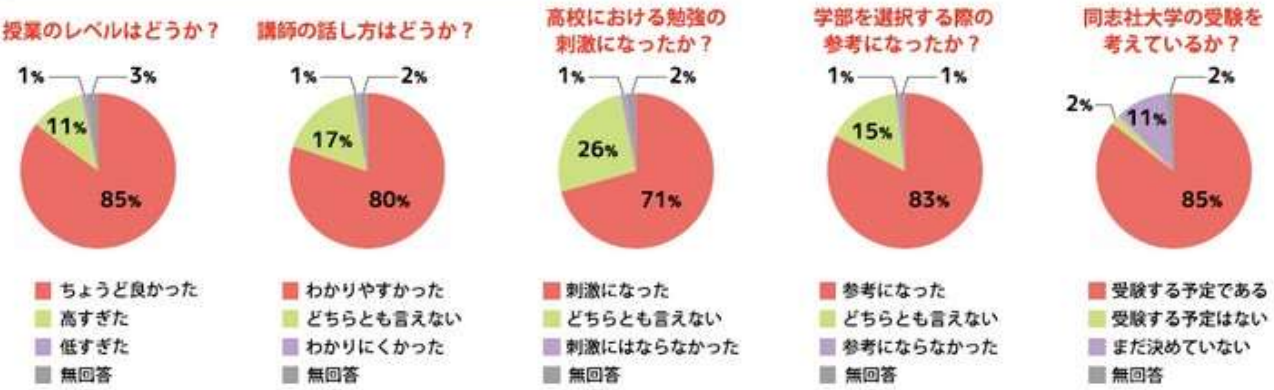
※上記一覧は予定ですので、開催時期や会場が変更されることがあります。
※参加にかかる費用は学習支援・教育開発センターが負担します。

2018年度「大学入学準備講座」開催報告

2005年度より高校生向けに開講している「大学入学準備講座」（大学における必要な学力レベルを教えるための特設授業を提供することで、高校生に正しい学部選択の機会を与えることを目的としている講座）は、今年度も14講座を開講し、37校の高等学校より延べ1221名の高校生および同伴の保護者の方等（高校生1196名、保護者等25名）に参加いただきました。

初めて受ける大学の講義にはじめは緊張していた高校生も、動画や生の実験データを採り入れた講義やグループディスカッションなど、普段の授業とは違う大学の講義に大変刺激を受けたようです。終了後のアンケートでは、高校の授業との違いを実感しつつ、大学で学ぶことの意義や大学で専門的な分野の研究ができることへの期待、今まで疑問に思っていた他学部との違いが明確となり、学部選択の参考になったようです。

アンケート結果



受講者の声

高校生

- 自分には「大学進学はしなければならない」と決めつけてしまっているところがあることに気づいた。この講義を受講して少し自分の不安がなくなったように思いました。しっかりとした目的をもって大学進学しなければ大学生活を送るにおいて有意義なものにはできないと思った。
- 高校の授業とは違って国語や数学などの教科の勉強ではない授業を受けて、これが大学なんだと実感した。まだ自分が将来何をしたいかは具体的に決まってはいないけれど、自分がもっと知りたい、学びたいと思える事を学べる学部に行けるように高校での勉強をもっとがんばろうと思った。
- 情報量はとても多かったけれど、こんな先生の講義をうけたいと思いました。文理選択などをどうするか考える上で、とても参考になりましたし、とても刺激になりました。
- わかりやすく丁寧な説明で内容に入りやすかったし、何より興味をひくおもしろい内容でした。なかなか触れることのない昔の資料であったり、比較して見ることで時代を掴むという作業であったり、大学の研究への想像がリアルに見えてきたように思います。答えのない研究というふうにおっしゃっていて、それはずっと答えを探し続けられるということであるし、それが1番おもしろいと思いました。
- 大学生活は「未知」の社会に出る前の、未知に関して考える段階だということをおっしゃっていました。その事をふまえて自分の興味がある分野に進めたらなと思いました。

講義風景

講義を集約した講義録を発行しています。

保護者

- 何十年前の講義スタイルとは変わり、スライドを使いわかりやすく興味ある内容で、時間がすぐにたちました。
- パワーポイントがわかりやすかった。先生の話は丁寧で1から10まで説明してくれていた。客観的な視点で内容がわかりやすかった。
- ゼミというものが良くわかっていなかったので具体的な活動を知る事ができて良かった。

136本の動画コンテンツが視聴できます。

大学入学準備講座のページ　https://clf.doshisha.ac.jp/preparation_course/course.html

＊動画閲覧に必要なID・パスワードは学習支援・教育開発センターにお問合せください

センター事務室からのお知らせ

新任教員研修会／TA研修会開催のお知らせ

学習支援・教育開発センターでは、2019年度の新任教員向けおよびTA向けの研修会を開催します。
対象者以外でも、本学教職員であれば参加可能ですので、ご希望の場合は学習支援・教育開発センター事務室までお問合せください。また、研修会の内容は、後日ホームページでも公開予定ですので、あわせてご覧ください。

新任教員研修会

日程 4月2日(火)13:00～16:25

会場 今出川キャンパス：寧静館5階会議室

内容
- ガヴァナンス、意思決定の仕組み
- グローバル化の取組
- 研究活動
- 教育活動
- 入学試験業務
- 学生支援体制
- 教育/研究倫理

TA研修会

日程
4月4日(木)12:00～12:50
4月5日(金)12:00～12:50
4月8日(月)18:30～19:20

会場
今出川キャンパス：良心館ラーニング・コモンズ
京田辺キャンパス：知真館232番教室
恵道館201番教室
ラーネッド記念図書館ラーニング・コモンズ

内容
- TA制度、TAの心得
- TAの事務手続き

※受講者全員に「受講証明書」を発行します。
TAの研修会参加確認の目安にして頂く等、ご自由にご活用ください。

※各研修会の詳細については、本センターのホームページをご参照ください。

お知らせのページ https://clf.doshisha.ac.jp/information/information.html

BOOKS　新着図書情報

学習支援・教育開発センターでは、大学改革やFD関係の図書資料を収集し、専任教職員の方に事務室で閲覧していただけるようにしています。貸出も可能ですので、センターに直接お越しになるか、ホームページ掲載の所蔵図書資料一覧をご覧いただき、ご希望の資料があればメールまたはお電話でご連絡ください。学内便でお届けします。

大学生白書 2018
溝上 慎一(著)
東信堂
2018. 8
ISBN:978-4-7989-1513-5

シリーズ大学の教授法4 学習評価
中島 英博(著)
玉川大学出版部
2018. 6
ISBN:978-4-4724-0534-1

大学教学マネジメントの自律的構築
関西国際大学(編)
東信堂
2018. 9
ISBN:978-4-7989-1519-7

＊センターで所蔵した方が良いと思われる書籍等がありましたらご推薦ください。下記の「図書資料のご案内ページ」よりご覧いただき、ご活用ください。

図書資料のご案内ページ https://clf.doshisha.ac.jp/books/list.html

Column 大学教育の今「認証評価の評価基準―内部質保証―」

本学が2020年に受審する認証評価(専門職大学院を除く)では、評価の基準の1つに「内部質保証」が挙げられています。内部質保証とは、PDCAサイクル等を適切に機能させることによって、質の向上を図り、教育、学習等が適切な水準にあることを大学自らの責任で説明し証明していく学内の恒常的・継続的プロセスのことをいい、「大学は、自ら掲げる理念・目的を実現するために、内部質保証システムを構築し、恒常的・継続的に教育の質の保証及び向上に取り組まなければならない」とされています。本学でも、2017年に全学レベルで内部質保証推進会議が、各学部及び研究科には「自己点検・評価委員会」が設置されましたが、PDCAサイクルを機能させるためには、教育の質の保証と向上に取り組む前段として、各学部・研究科が学習成果を把握することが重要になります。

これまでも、各学部・研究科が独自に学習成果の測定に取り組んでこられたかと思います。測定ツールには、試験、プレースメントテスト、卒業論文、卒業研究、標準テスト、資格試験合格率などの直接的な測定ツールのほか、就職率、大学院進学率、学生調査、ミニッツ・ペーパーによる評価などの間接的な測定ツールなど様々なものがあります。当センターも、「キャンパスライフに関するアンケート調査」「授業評価アンケート」「授業講評」を実施し、教育改善の一助となるよう皆さまにご協力いただいているところです。

すでに各学部・研究科では今年度の「自己点検・評価ワークシート」の作成が終わり、それを踏まえた改善のステップに入っているかと思います。学習成果の把握のみならず、それをどのように改善につなげていくかについて、当センターは、今後も全学的に有益な情報提供や提案ができるよう努めて参りたいと思います。

学習支援・教育開発センター所長　大島 佳代子

CLF REPORT
Center for Learning support and Faculty development report

「シーエルエフ レポート Vol.30」
同志社大学 学習支援・教育開発センター レポート

発行日：2019年3月29日
発行者：同志社大学 学習支援・教育開発センター
京都市上京区今出川通烏丸東入 明徳館1F
Tel. 075-251-3277 Fax. 075-251-3025
E-mail. ji-kyoik@mail.doshisha.ac.jp
https://clf.doshisha.ac.jp/